

ことばの迷い道

世界でいちばん(?) 複雑な声調体系をもつ言語

うちほら ひろと
内原 洋人

メキシコ国立自治大学

動詞の人称変化と聞いて何を思い浮かべるであろうか。大学の第二外国語でスペイン語やフランス語、ドイツ語をかじった方々はピンとくるかもしれない。スペイン語の *hablo* 「わたしは話す」、*hablas* 「君は話す」、*habla* 「彼は話す」……とやるあれである。試験のために人称活用を覚えるのに苦労した思い出がある方も多いかも。ここメキシコで話されるトラパネク語(話者たち自身は「メパー語」という呼称を好む)も、動詞の人称活用をする。例えば、「縛る」という動詞の活用は次のとおりである。ニラフマー「わたしは縛った」、ニタラフマー「君は縛った」、ニラフマー「彼は縛った」、ニラフマー「君を含む我々は縛った」、ニラフマー「君を含まない我々は縛った」、ニラフマー「君たちは縛った」、ニラフマー「彼らは縛った」。あれ、「君は」以外全部同じではないか。これでは日本語と変わらないのではないか。でも共同研究者のグレゴリオ氏は違うという。この種明かしは後ほど。

メキシコと聞いて皆さんは何をイメージするだろうか。残念ながら、治安について不安を抱く方が多いかもしれない。しかし、わたしはメキシコ市に五年住んで地下鉄で一度スリに遭った程度である。もう一度はケータイを盗まれそうになったが、チェーンでズボンに括り付けておいたので未遂で終わった。トラパネク語が話されるのは、メキシコ中部ゲレロ州の山間部、トラパ市周辺である。わたしの勤務するメキシコ市からバスで六時間ほど、その先には世界的に有名な観光地アカプルコがある。今は世界一危険な観光地ともいわれることもあるが、何度も行ったらわたしからすると、少なくとも観光エリアはそんなことはない。ただし、ゲレロ州山間部は本当に危ないと聞く。話者向けワイクシヨップをやってくれと頼まれたときも、正直躊躇

した。でも話者たちが是非と書いてくれているのである。これは言語学者として断るわけにはいかない。あの程度の覚悟はしつつ、わたしは三時発トラパ市行きバスに乗り込んだ。朝六時ごろ到着すると、すでに共同研究者のグレゴリオ氏が待っていてくれた。朝四時から張り込んでいてくれたという。その後四日間トラパ市周辺に滞在することになるのだが、グレゴリオ氏の同伴なしでホテルから出ることは一瞬もなかった。ワイクシヨップでは、遠く日本からやってきた言語学者がわざわざ来てくれたということで歓迎していただいた。お礼にということでホテル代と四日間の食事をすべてカンパしてくれたうえ、最終日には当地の名産である手作りの小さい椅子までいただいた。治安や貧困の問題に悩まされつつも、どこまでも情に厚いトラパネク族である。

上述の動詞活用について、種明かしをすると、カナでは表記できないのだが、じつは声調が違うのである。そう、トラパネク語は中国語のような声調言語なのだ。先の「縛る」を声調も含めて表記すると、次のようになる。nīhāmaa, nīrahāmaa, nīrahāmaa, nīrahāmaa, nīhāmaa, nīhāmaa, nīhāmaa (声調は三つあって、高、中、低である。それぞれ a, a, a のように示す)。書いてあればそれなりに区別できるが、これを聞いただけではべて区別するのは至難の業である。そんなこともあって、トラパネク語は世界でいちばん複雑な声調体系をもつ言語ともいわれる。わたしの印象でいうと、まあ複雑ではあるけれど、世界一は言い過ぎかもしれない。世界一危険かもしれない観光地の近くで、世界一情に厚いかもしれない民族により話される、世界一複雑かもしれない声調体系をもつ言語を研究できるのも、メキシコを離れられない理由のひとつである。